

新学習指導要領「コミュニケーション英語」 の活動について考える

松林 城弘

1. はじめに

文部科学省は、平成20年3月に小学校及び中学校学習指導要領の改訂を行い、翌年3月には高等学校学習指導要領の改訂を行った。新指導要領は、小学校が平成23年度、中学校が平成24年度、高等学校が平成25年度にそれぞれ実施となる。外国語活動や外国語に関する各科目の項目に注目してみると、小学校では5・6年で外国語活動が必修となり、中学校では週あたりの時間数や新語数が増加し、高等学校では科目構成が刷新されるなど大きな特徴を持った改訂となっている。

本論では、新しくなる学習指導要領の外国語科(活動)の目標や改訂の要点を概観しながら、学校現場でどのような授業が求められているのか、どのような外国語の活動ができるのか具体的に考える。特に高等学校の「コミュニケーション英語」の活動に焦点を当てながら、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことの総合化の基礎となる活動について考える。

2. 新学習指導要領(外国語活動編・外国語編)改訂の要点

本節では、小学校、中学校、高等学校の外国語科(活動)の目標を概観した後、特に高等学校において、どのような外国語活動が求められているのか整理しておく。

まず、小学校の外国語活動の目標は次の通りである。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

(小学校学習指導要領解説 外国語活動編 p. 7)

小学校では、外国語を通じて、①言語や文化についての理解を深め、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけながら、③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことで、中学校や高等学校の外国語学習につながるコミュニケーション能力の素地をつくることを目標としている。

続いて、中学校の外国語科の目標は次のようになっている。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

(中学校学習指導要領解説 外国語編 p. 6)

小学校と同じように、外国語を通じて、①言語や文化の理解を深め、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけることに加えて、③聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの4技能を強調しながら、コミュニケーション能力の基礎を養うことを目標としている。

最後に、高等学校の外国語科の目標は次の通りである。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養

う。

(高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編 p. 8)

高等学校では特に、聞いたり読んだりして得た情報や考えなどを的確に理解したり、自分が伝えたい情報や考えなどを受け手に対して適切に伝えたりする能力が強調されている。

見てきたように、小・中・高等学校の目標の中に現れる活動は、小学校の「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」という活動から、中学校の「聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと」の4技能を中心とした活動に移り、高等学校の「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする」活動へと進展していく。高等学校の活動は、中学校までに培ってきた4技能を統合して的確かつ適切に使う活動であることが判る。こうした4技能を総合的に育成するという方向性は、次の高等学校指導要領の改善の基本方針にはっきりと現れている。

- 外国語科については、その課題を踏まえ、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識について、自らの体験や考えをなどと結びつけながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、中学校・高等学校を通じて、4技能を総合的に育成する指導を充実するよう改善を図る。
- 指導に用いられる教材の題材や内容については、外国語学習に対する関心や意欲を高め、外国語で発信しうる内容の充実を図る等の観点を踏まえ、4技能を総合的に育成するための活動に資するものとなるよう改善を図る。
- 「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を総合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うように改善を図る。また、コミュニケー

ションを内容的に充実したものとすることができるよう、指導すべき語数を充実する。

- 高等学校においては、中学校における学習の基礎の上に、聞いたことや読んだことを踏まえた上で、コミュニケーションの中で自らの考えなどについて内容的にまとまりのある発信ができるようにすることを旨とし、「聞くこと」や「読むこと」と、「話すこと」、「書くこと」とを結び付け、四つの領域の言語活動の統合を図る。

(高等学校習指導要領解説 外国語編・英語編 一部抜粋 p. 4)

下線部（筆者）が示すように、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的（統合的）な活動や指導が必要であることが繰り返し強調されている。文法については、二重下線部（筆者）が示すように、コミュニケーション（活動）につながる、又は一体となるような指導をすることが求められている。加えて、外国語科の目標に示されている「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする」ためには、次のように音声面の指導にも配慮するものとしている。

リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること。

(高等学校習指導要領解説 外国語編・英語編 p.16)

このように、高等学校の活動が目指す一つの方向性は、文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、音声面の指導にも配慮しながら、「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと」・「書くこと」を結び付け、四領域の言語活動の統合を図ることであると言えよう。小学校の「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」という段階から、中学校の「聞くこと・話すこと・読むこと・書くことの4技能を中心とした活動」の段階に移り、高等学校では、中学校までに培ってきた4技能を「統合し

て的確かつ適切に使う」段階を目指していることが判る。

こうした高等学校の外国語科の目標や活動の指針は、新しく設けられる「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「コミュニケーション英語Ⅲ」、「英語表現Ⅰ」、「英語表現Ⅱ」、「英会話」といった科目ごとにさらに細分化して掲げられているが、本論では特に、「コミュニケーション英語」に的を絞りながら、高等学校指導要領が目指す「音声面に配慮しながら、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことの4技能の総合的・統合的な活動」がどのようにすれば効果的に実現できるのか、具体的な例を挙げながら考えていく。

3. 4 技能総合化のための基礎的な活動

本節では、「リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること」に焦点を当てながら、聞くこと・話すこと、読むこと・書くことの基本となる活動について、具体例を見ながら考えていく。併せて、「文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行う」ための方法についても考えてみたい。例として扱う基本文は、出来る限り情報が身近で興味深いものである (of interest) という観点から、次に示すスマートフォン (smartphone) に関する時事英語を使う。

For the first time, smartphone sales have overtaken sales of personal computers. According to International Data Corp., 101 million smartphones were shipped in the last three months of 2010. Now, this overtakes the 92 million PCs shipped in the same period. It was a big 87 percent jump for smartphones, and by contrast, there was sluggish

growth for PCs, which was just 3 percent.

(CNN English Express, June 2011, p.19)

生徒は、次のⅠ～Ⅴの作業を通して、4技能の総合的活動や文法・語彙の学習を経験する。

Ⅰ. 聞いて概要を把握する【聞く活動】

下の①②のフローチャートを参考にしながら、空白部分にメモをとりながら英文を聞く。その際、聞くスピードを遅い段階から早い段階に切りかえながら聞く。何回か聞き終えた後、メモを見ながら、①②の内容が日本語で言えるかどうか確認する。この活動を通じて、概要を把握することを目的とした聞く力が培われる。

①何が何を追い越しましたか？ ※ ship: 出荷する

For the first time,

() has overtaken ()

According to International Data Corp,

() were shipped in ().

Now,

this overtakes () shipped in ().

②前年同期の伸び率は？ ※ sluggish: 緩やかな

() jump for ().
and by contrast, () for ().
↓
which was ().

II. 情報の流れに沿って、意味を素早く読み取る【読む活動】

下記のような意味のまとまり (sense group) ごとに区切った英文を与え、そのまとまりごとに日本語訳を付けていく (sight translation)。この活動を通じて、日英語の語順の違いによる影響を最小限に減らし、情報の自然な流れに沿って読む力が培われる。

For the first time,/	初めて /
smartphone sales have overtaken	スマートフォンの売れ行きが上回った
sales of personal computers.//	パソコンの売れ行きを。//
According to International Data Corp., /	インターナショナル・データ・コーポによると /
101 million smartphones were shipped/	1億100万台のスマートフォンが出荷された /
in the last three months of 2010.//	2010年最後の3ヵ月で。//
Now, this overtakes the 92 million PCs/	さて、この数は9200万台のパソコンを上回っている /
shipped in the same period.//	同じ時期に出荷された。//
It was a big 87 percent jump for smartphones,/	スマートフォンは87%増の大幅な伸びを記録した /
and by contrast,/	それとは対照的に /
there was sluggish growth for PCs,/	パソコンの伸び率は緩やかで /
which was just 3 percent.//	わずか3%増であった。//

Ⅲ. リズムやイントネーションなどに注意しながら、情報の流れに沿って聞いたり話したりする【聞く・話す活動】

Ⅱで使用した意味のまとまりごとの英文を使い、リテンション (retention) とシャドーイング (shadowing) をする。リテンションは、意味のまとまり毎に音声を聞き、そのまとまり毎にリピーティングをする活動で、記憶力・集中力・表現力が身につくとされている。シャドーイングは、音声の後に続いて影のようにリピーティングをする活動で、英語の発音やリズム・イントネーションを身につけることができるとされている。リテンションやシャドーイングは、単に音声をまねるだけではなく、意味内容も把握しながら行うので、情報の流れに沿って聞くこと、話すことの基礎的な力も養える。

Ⅳ. 聞き取った情報を基にして、書いたり話したりする【聞く・話す・書く活動】

Ⅰで示したフローチャートを使わずに基本本文を2～3回聴きながら、聞き取れる情報をメモし、そのメモした断片的な情報を基にして、元の基本本文を書いて復元したり話したりする。この活動を通じて、概要を聞き取る力や、概要を基にして書いたり話したりする力が身につく。

Ⅴ. 使用場面を考慮して文法を言語活動と一体的に捉える【文法学習】

基本本文で下線を引いた箇所 (have overtaken, overtakes) は、インプット強化 (input enhancement) として学習者の意識を言語形式に向けさせる働きがある。言語形式が使われる文脈を考えることにより、どうして各々の場面で現在完了形と現在形が使い分けられているのか、その使い分けはどのような効果や働きを持っているのか、といった言語形式の使用場面や働きの違いを感じ取ることができる。

見てきたように、Ⅰ～Ⅴで示した活動は、50語から100語程度の比較的短い英文を活用して、4技能の基礎的な力を培ったり、言語の使用場面や働きに注意を向けさせる文法学習の一例である。Ⅰ～Ⅴの活動は、

次の①～③のようにまとめられる。

- ①リテンションやシャドーイングといった技法を取り入れながら「リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたり話したりすること」の基礎的な力を身につける活動。
- ②「意味のまとめり」ごとに情報の流れに沿って読んだり、「概要」を把握した上で書いたり話したりする基礎的な力を身につける活動。
- ③言語の形式 (form) や意味 (meaning) に焦点を当てるだけでなく、使用する場面や働きにも注意を向けさせる語彙・文法学習の活動。

言うまでもなく、これらの活動は、より実際的なコミュニケーション活動を行う前提となる基礎的な活動であり、比較的短い英文を使って出来る4技能の総合化を目的としたルーティーンワークのような活動である。従って、これらの活動を日常的に行う基礎的な活動として位置づけ、さらにより大きな負荷がかかる、実践的なコミュニケーション活動が並行して行なわれることが必要である。例えば、文法学習や聞く・話す活動に焦点を当てたタスク活動 (task activity, 高島 2000, 2011), 4技能をバランスよく取り入れたストーリー・リテリング (story retelling, 小管・小管 1995), 聞くこと・書くことに重点を置いたディクトグロス (dictogloss, 村野井 2006, 金谷 2009), 意味や文法のまとめりを重視したチャンキング・メソッド (chunking method, 田中 2003, 2006) などなど、幾つかのコミュニケーション活動を組み合わせながら、4技能の総合的・統合的な運用能力が求められる活動へとバランスよく繋げていくことが求められる。

4. おわりに

新学習指導要領は、小学校の「コミュニケーション能力の素地を養う」段階から、中学校の「コミュニケーション能力の基礎を養う」段階を経て、高等学校の「4技能を統合して的確かつ適切に使う能力を培う」ことを目指している。その目標のためには、本論で概観したように、4技能の基礎的な能力の育成を目指した日常的な活動を足掛かりとして、さらに複数の活動を統合的にバランスよく組み合わせることが肝要であると考えられる。

特に、高等学校の「コミュニケーション英語」では、タスクのような要素を含んだコミュニケーション活動が有効である。高島(2000: 36)は、タスク活動の特徴として、次の6つの条件を挙げている。

- (1) 意味・伝達内容が中心であること (message-focused)
- (2) 言語を用いて与えられた活動目標を達成することが第一義であること (completion)
- (3) 意味のやりとりがあること (negotiation of meaning)
- (4) 2つ以上の構造の比較があること (comparison of structures)
- (5) 話し手と聞き手に情報(量)の差があること (information gap)
- (6) 活動や得られる情報が興味深いものであること (of interest)

タスクは、原則として対話形式の活動であるが、タスクに見られる6つの条件は、教室という人工的な環境で相手と出来る限り自然なコミュニケーションをするための必要条件である。繰り返しになるが、まずは4技能の基礎的な能力を養うために、第3節で示したようなルーティンワークを日常的に取り入れ、その上でタスクのような6つの条件が含まれるコミュニケーション活動を実践することが「4技能を統合して的確かつ適切に使う」能力の育成につながるのではないだろうか。

高等学校では、平成 25 年度から「コミュニケーション英語」が始まる。本論で述べてきた 4 技能の基礎的な能力を身につけるための活動や、それを土台にしたより実践的なコミュニケーション活動が授業の中でバランスよく組み合わせられることが、「コミュニケーション英語」が、名実共にコミュニケーションを重視した新科目となる第一歩ではないだろうか。

参考文献

- CNN English Express. 2011. 6月号. 朝日出版社.
- 小管敦子・小管和也. 1995. 『英語授業のアイデア集 英語教師の四十八手 第8巻 スピーキングの指導』 研究社.
- 高島英幸 (編著). 2000. 『実践的コミュニケーション能力のための英語タスク活動と文法指導』 大修館書店.
- 高橋英幸 (編著). 2011. 『文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』 大修館書店.
- 田中茂範・佐藤芳明・河原清志. 2003. 『チャンク英文法』 コスモピア.
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一. 2006. 『英語感覚が身につく実践的指導：コアとチャンクの活用法』 大修館書店.
- 村野井仁. 2006. 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店.
- 金谷憲 (編集代表). 2009. 『英語授業ハンドブック』 大修館書店.
- 文部科学省. 2008 a. 『小学校学習指導要領解説 外国語編』 東洋館出版.
- 文部科学省. 2008 b. 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 開隆堂.
- 文部科学省. 2010. 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』 開隆堂.